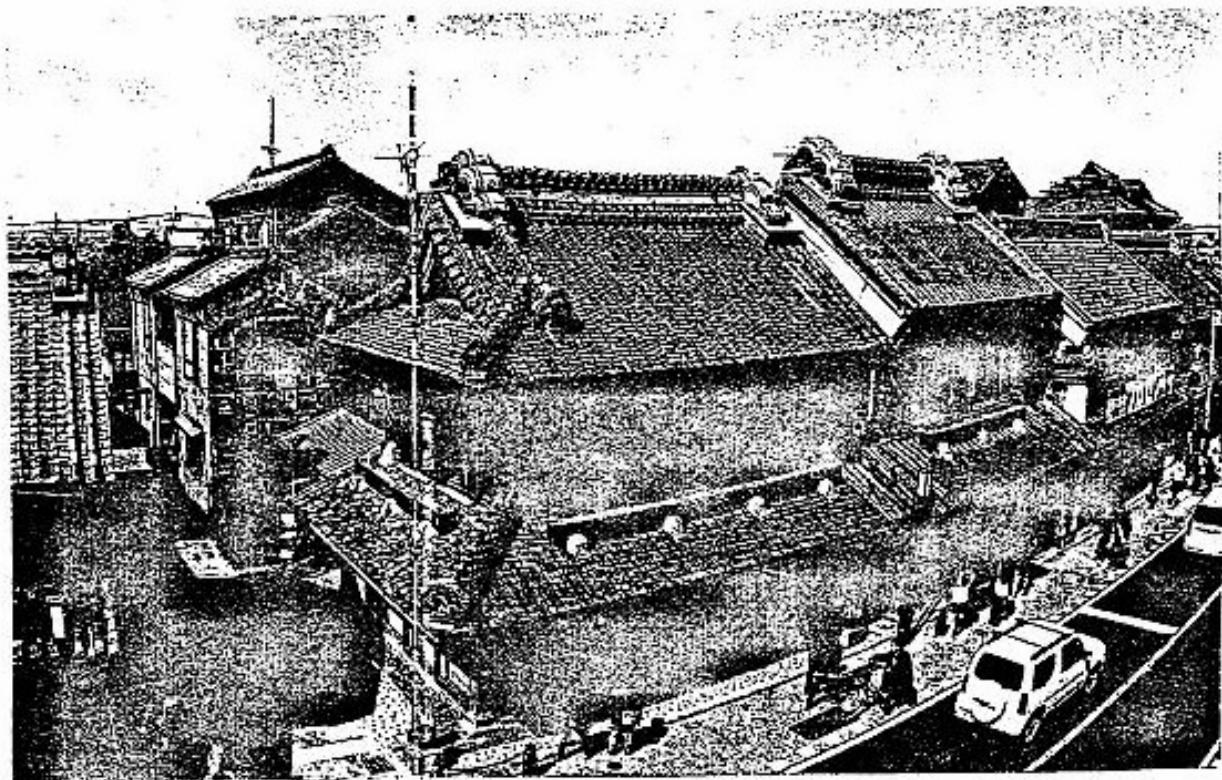


平成20年7月23日(水)

第382回史跡めぐり

小江戸「川越」を歩こう

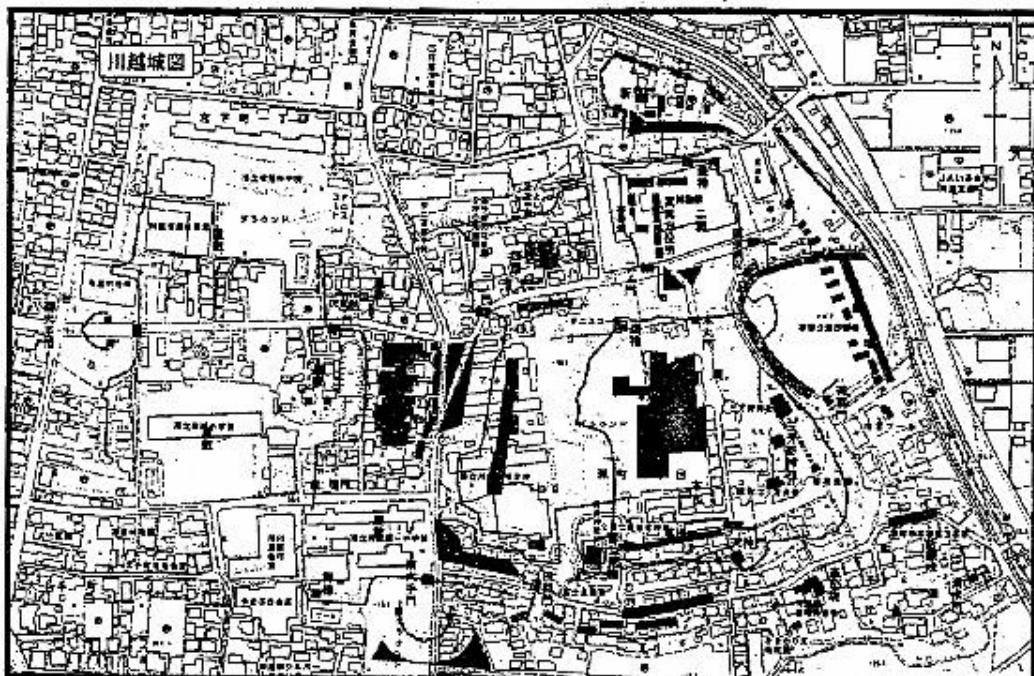
NPO法人 越谷市郷土研究会



第382回 史跡めぐり

小江戸「川越」を歩こう

- ・期日 平成20年7月23日(水) (雨天決行)
- ・集合場所 JR南越谷駅前
- ・集合時間 午前8時00分
- ・コース 南越谷駅=(武藏野線)=北朝霞駅・朝霞台駅=(東上線)=川越駅=(バス)=喜多町——氷川神社——市立博物館——三芳野神社——本丸御殿——時の鐘——菓子屋横丁——蔵の町——大正浪漫通り——成田山別院——喜多院——東照宮——中院——川越駅=(東上線)=朝霞台駅・北朝霞駅=(武藏野線)=南越谷駅 (午後5時頃予定)
(歩行距離 約6.5K)
- ・参加費 4000円
(交通費・入館料・昼食代・資料代・保険料等)
- ・案内者 常任幹事 中村幸夫



■川越市のプロフィール

川越市は埼玉県の中央部よりやや南部、武蔵野台地の東北端に位置し、109.16平方キロの面積と33万人を超える人口を有する。

古代より交通の要衝、入間地域の中心として発展してきた。平安時代には桓武平氏の流れをくむ河越氏が館を構え勢力を伸ばした。

室町時代には、河越城を築城した太田道真・道灌親子の活躍により、扇谷上杉氏が関東での政治・経済・文化の一端を担うとともに、河越の繁栄を築いた。江戸時代には江戸の北の守りとともに舟運を利用した物資の集積地として重要視された。

大正11年には埼玉県内で初めて市制を施行し、昭和30年には隣接する9村を合併し現在の市域となった。平成15年には県内で初めて中核市に移行した。

川越市は、都心から30キロの首都圏に位置するベッドタウンでありながら、商品作物などを生産する近郊農業、交通の利便性を生かした流通業、伝統に培われた商工業、豊かな歴史と文化を資源とする観光など、充実した都市機能を有している。現在も県南西部地域の中心都市として発展を続けている。

■氷川神社

○由緒

古墳時代の欽明天皇2(571)年9月15日鎮座。

武藏国造が大宮氷川神社より分祀、奉斎したという。

下って室町時代の長禄元(1457)年川越城の築城にあたった太田資長(のちの道灌)は篤く当社を尊崇し、献詠和歌を残している。

天文6(1537)年の合戦の様子を描いた「川越軍記」にも人々の参詣が盛んであったことが記されている。

小田原北条氏滅亡後の天正19(1591)年以来、関東を支配した徳川氏は重臣を川越城主として江戸北方の守りにつかせたが、以後幕末まで歴代城主は藩領の總鎮守として尊崇した。

文禄4(1595)年酒井忠利が社領を寄進したのをはじめとして、老中松平信綱らの社領加増、寛永5(1628)年酒井忠勝が本殿を修理、嘉永2(1849)松平斎典の代に現在の本殿が竣工している。

○社殿(県指定文化財)

入母屋造りの現本殿は天保13(1842)年起工、嘉永2(1849)年竣工した彫刻は当時の名工嶋村源藏(俊表)の手によるもので50数種の丹念な地彫りを施し、精巧な彫刻(江戸彫・関東彫ともいう)を充填し、特に浮世絵の広重調の波や、氷川祭礼の山車の図柄等を特色とする。江戸時代の代表的貴重な建造物である。

○八坂神社社殿(県指定文化財)

寛永14(1637)年三代将軍家光が江戸城二の丸に東照宮として建立したが、明暦2(1656)年三芳野神社の外宮として移築された。更に明治5年氷川神社境内に移築され八坂神社の社殿となった。江戸城内の宗教的建造物の遺構として全国唯一の貴重な社殿である。

○柿本人麻呂神社(人丸社)

戦国時代に丹波の綾部から川越に移住した綾部一族が始祖柿本人麻

呂を奉斎した。学業成就・安産・火防の守り神として信仰を集めている。

人丸＝火止マル

人丸＝人産マル

○太田道灌手植えの矢竹

川越城築城以来太田道真・道灌親子は当社を篤く尊崇し、特に道灌は長禄元年に詣りて和歌を献納した(慕景集)

老いらぐの身をつみてこそ 武藏野の 革にいつまで残る白雪
境内には当時道灌がみずから植えたとされる矢竹が現存する。

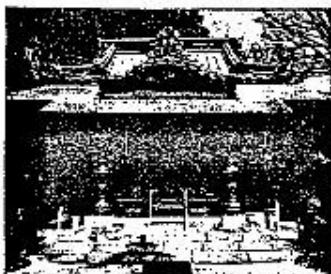
○川越氷川祭(川越まつり)

毎年10月に行われる川越まつりは元来、当社の例大祭の附け祭りである。江戸時代川越城主となつた老中松平信綱公が町をあげての祭礼がないことを惜しみ、慶安元(1648)年当社に神輿2基・獅子頭・太鼓等を寄進しそれまでの例大祭にあわせて江戸の天下まつりの様式に則つた神幸祭を催すことを薦めた。

これより氷川神社の神輿行列は川越城内に参入城主の上覽に供しまた氏子町内を渡御することが恒例となつた。

幕末には10ヶ町から趣向をこらした山車がでて華美を競つたが各々の屋根には神話や伝説の登場人物を象つた人形が飾られた。

川越氷川祭の山車行事は平成17年、国の重要無形民俗文化財に指定された。



氷川神社本殿



本殿の彫刻
(勿来の関・義家)



本殿の彫刻
(頼朝と千羽鶴)

■川越市立博物館

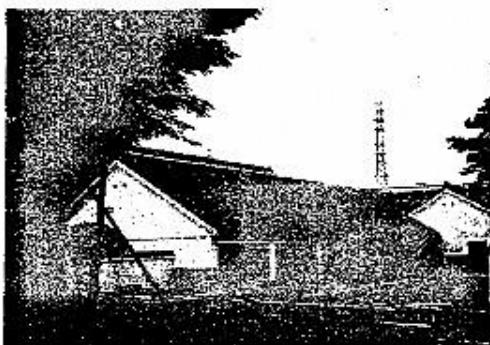
川越は関東地方の代表的な城下町で、歴史的・文化的な伝統に育まれて発展してきた。市内には土蔵造りの店舗などに象徴されるように多数の貴重な文化遺産が残っている。

これらの資料を系統的に収集・保存・調査研究・公開することにより、郷土の歴史と文化に対する理解と認識を深め、生涯学習の場としての施設として、平成2年建設された。

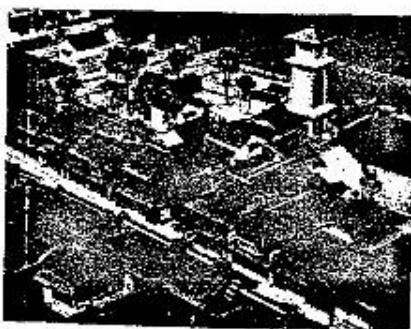
川越城二の丸跡に建てられた博物館は、蔵造りをイメージした切り妻の瓦屋根にしつくい風の白壁の建物となっている。

常設展示室は「近世・近代」に重点がおかれ、蔵造りの町並みを実物大

で復元、川越の歴史が総合的に理解できる展示となっている。
開館以来、毎年およそ17万人が訪れている。



川越市立博物館全景



蔵造りの町並復元模型

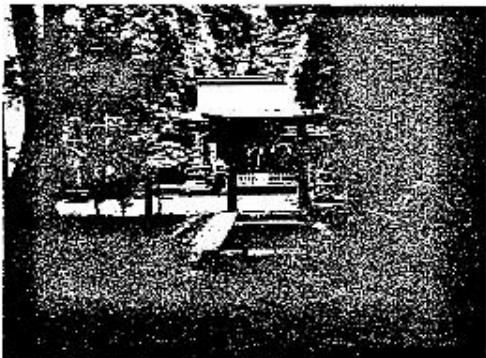
■三芳野神社

川越城の鎮守として寛永元(1624)年、時の城主酒井忠勝によって再建されたといわれている。

旧城内の天神曲輪に鎮座していたもので、土塁と堀に囲まれた細い参道が曲折しつつ長く続いていた。

この天神様は、わらべ唄「どうりやんせ」発祥の地といわれている。川越城内にあったため、一般の人の参詣はむずかしく、その様子がうたわれていると伝えられている。

♪どうりやんせどうりやんせ ここはどこのはそみちじや
てんぐんさまのはそみちじや … ♪
神社名は「伊勢物語」の「入間の郡三芳野の里」に由来する。



三芳野神社と参道

■川越城

○川越城の歴史

川越城は、扇谷上杉持朝が長禄元(1457)年に家臣の太田道真(資清)・道灌(資長)親子に命じて築城させたものである。当時持朝は古河公方足利成氏と北武藏の霸権をめぐって攻防を繰り返しており築城はこれに備えるものであった。

小田原を拠点に武藏への進出をはかる後北条氏は天文6(1537)年

に川越城を攻め落とした。天文15(1546)年扇谷上杉氏は、それまで対立していた山内上杉氏・古河公方と手を結び川越城の奪還を図るが奇襲にあい大敗する。(川越夜戦)

天正18(1590)年秀吉の関東攻略に際し、川越城は前田利家らに攻められて落城した。同年8月家康は江戸に入城する。川越城には江戸の北を守る重要な拠点として酒井氏が配置され、その後も幕府の要職にある大名が藩主に任命された。

寛永16(1639)年川越藩主となった松平信綱は川越城の本格的な拡張・整備を行い、本丸・二の丸・三の丸等の各曲輪、4つの櫓、13の門からなり、総面積9万8千坪(約326千平方m)余りの規模を持つ城郭となつた。

○川越城本丸御殿

嘉永元(1848)年時の藩主松平斉典が、造営したもので、当初16棟、1025坪(約3388平方m)の規模を誇っていた。現在は玄関・広間部分と移築復元された家老詰め所を残すのみであるが、国内でも御殿建築が現存する例は極めて少なく貴重である。

家老詰め所は、明治6年上福岡市の福田屋の分家に移築され昭和62年まで母屋として使用されていたものである。

○川越城の七不思議

- ①初雁の杉——毎年初雁が城内三芳野神社の裏にある大杉の真上までくると三声なきなが三度回って南に飛び去るという。
- ②霧吹きの井戸——城跡の一角に井戸があり、その蓋をあけるとたちまち霧が立ちこめ城を包み敵から見えなくなつたという。
- ③人身御供——太田道真が築城に際し愛娘を竜神にささげ無事完成させたという。
- ④夜奈川(遊女川)の小石供養——川越近在におよねという娘が川越城主の家来に嫁いだが、姑にいじめられた上誤って大切な皿を割ってしまったので川に身投げした。人々は冥福を祈り「およねさん」と呼びながら小石を投げてやつたという。
- ⑤七つ釜と片葉の葦(浮島稻荷社一帯)——川越落城の時姫君と侍女が城の下の川に落ちた(七つ釜)。近くの葦の葉につかつまたが葉がさけてしまつついに溺れ死んだ。そのため付近の葦の葉は片葉であるという。
- ⑥天神洗足の井水——築城のための水源地を案内してくれた老人は三芳野天神の化身であろうと思い、老人がその井水で足を洗つてることにちなんで名づけたという。
- ⑦城中蹄の音——川越城主酒井河内守重忠が夜毎蹄の音に眠りを覚ました。これは城中にある堀川夜討の屏風によるとして、半双を養寿院に寄進した。その後安眠できたという。

○川越城歴代藩主(前封地・移封地・幕府役職等)

酒井重忠(前・三河西尾 移・上野厩橋)→酒井忠利(前・駿河田中 留守居)→酒井忠勝(前・武藏深谷 移・若狭小浜 老中・大老)→堀田正盛(移・信濃松本 老中)→松平信綱(前・武藏忍 老中)→松平輝綱→松平信輝(移・下総古河)→柳沢吉保(移・甲斐甲府 大老格)→秋元喬知(前・甲斐谷村 老中)→秋元喬房(奏者番)→秋元喬求→秋元涼朝

(移・出羽山形 老中)一松平朝矩(前・上野厩橋)一松平直恒一松平直温一松平齐典一松平齐则一松平直侯一松平直克(移・上野前橋 政事總裁職)一松平康英(前・陸奥棚倉 老中)一松平康載(廃藩 川越藩知事)



本丸御殿



「江戸図屏風」の川越城

■時の鐘

周囲の建物を圧して建つ川越のシンボル。寛永年間(1624~44)、川越城主酒井忠勝によって建てられた。のち火災などにより何度も建てかえられ、現在の建物は川越大火の直後、明治26(1893)年の建築である。しかし建物の構造は江戸時代とまったく変わっていない。櫓の高さは16メートルで奈良の大仏とほぼ同じである。

今も1日4回、6時・12時・15時18時に市民に時を知らせている鐘の音は、平成8年環境庁(現環境省)主催の「残したい日本の音風景百選」に選ばれている。



時の鐘

■蔵造りの街「国重要伝統的建造物群保存地区」

本川越駅から北へ10分ほど歩いた一番街、通りに沿って黒い瓦屋根の重厚な建物が並ぶ風景は、とても21世紀とは思えない情緒にあふれ、まさに「小江戸」と呼ばれるにふさわしいたずまいだ。

一番街周辺で目にする蔵造りの建物は大多数が商家で、なかには江戸時代創業の和菓子の老舗もある。そのため蔵造りそのものの歴史も江戸時代まで遡ると考へてしまいがちだが、江戸時代の川越商人たちは、倉庫として使った土蔵は別として、店舗には石を置いた杉皮葺きの屋根の建物を構えていたといふ。

川越にこれほど多くの蔵造りの商家が建てられたのは、明治26(1893)年の川越大火に起因する。

このときの焼失家屋は町全体の3分の1を超える1300戸あまり。中心地区の被害は特にひどかった。

その大火に耐えて残ったのが江戸時代後期に建てられた土蔵造りの大沢家だつた。

その頃、西洋から耐火建築としてレンガ造りも紹介されていたが、川越商人たちは焼け残った大沢家の店蔵に注目。日本の伝統的な耐火建築である土蔵造りを取り入れ、同時に新しい材料であるレンガは屋敷塀や地下蔵に使うなどして町を復興させていった。

こうして黒漆喰と赤レンガの色調がしつくり調和した町の景観ができ上つた。

現在、一番街とその周辺に残る蔵造りの中で、大沢家住宅が国の重要文化財に、旧小山家住宅(蔵造り資料館)ほか、21棟が川越市の文化財に指定されている。

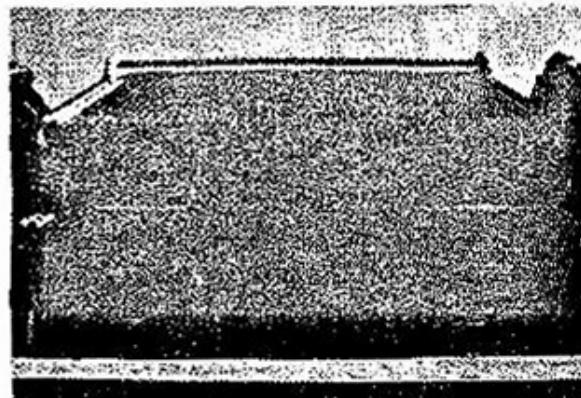
黒漆喰の壁、重厚な造りの大棟、かけ盛、観音開きの扉などそれに川越の蔵造り建築の特徴を備えながら、一軒ごとに異なる個性を持っておりその多様性に驚かされる。

○大沢家住宅

寛政4(1792)年、豪商西村半右衛門が建てた商家建築で国的重要文化財に指定されている。外観は間口が広くいかにも商家風だが、内壁に漆喰を用いたり、幅2尺の土戸でいざという時に1.2階を分離する工夫など、内部には防火・耐震に配慮した構造が見られる。

○旧小山家住宅

煙草卸商を営んでいた旧小山家住宅は現在「蔵造り資料館」として開放され、店蔵の裏に2階建ての木造主屋があり、文庫蔵・煙草蔵とともに一見の価値がある。



大沢家住宅



旧小山家住宅
(蔵造り資料館)

■洋風建築「都市建築景観100選」
蔵造りの町並みにアクセントを
加えているのが洋風建築。
川越を散策する際の大きな魅
力となっている。

○旧八十五銀行本店(現埼玉りそ
な銀行川越支店)

大正7年に建てられた。設計は
丸ノ内レンガ街の設計に携わ
り住宅設計の先駆者として知ら
れる保岡勝也。

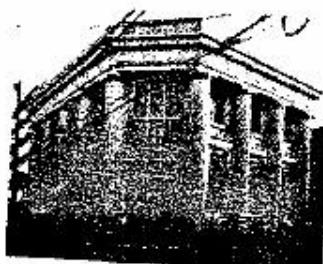
八角形のドーム屋根が特徴で、
国の登録文化財となっている。

○旧武州銀行川越支店(現川越
商工会議所)

昭和3年に建築家前田健二郎
が設計した。銀行建築の代表
例である。国の登録文化財と
なっている。



旧八十五銀行本店



旧武州銀行川越支店

■菓子屋横丁

ニッキやはっかの爽やかな香り。だんごやせんべいを焼く、こうばしい
香り——。

菓子屋横丁は、平成13年11月環境省の「かおり風景100選」に選ばれ
ている。

明治初期に川越砂出身の菓子職人で、芋菓子や麦こがし、だんご類を
つくりはじめた鈴木藤左衛門が、ここにきて菓子をつくったことがきっかけ
けとなつたといわれる。彼のもとで修行した弟子たちがのれん分けし、
さらに各地の菓子職人が軒を連ねるようになった。

日清戦争後、明治28(1895)年頃から大量の台湾産砂糖が輸入され、
まんじゅう・羊羹・あめなどが作られた。



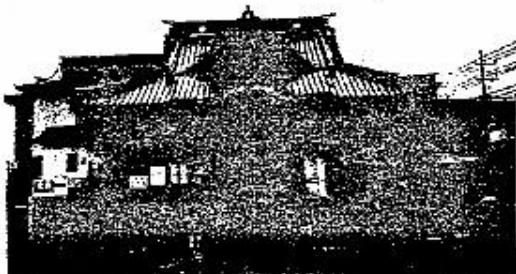
大正12年の関東大震災直後、都内の菓子屋が壊滅状態になったころに最盛期を迎えた昭和5年頃には70-80軒のあめ屋があった。現在の菓子屋横丁は、あめ細工をイメージしたガラスがちりばめられている石畳の道になり、その上を歩く観光客でいつも賑わっている。店頭に所狭しと並ぶ、昔なつかしい菓子を味わって子供の頃を思い出したり、横丁の姿に郷愁を感じたり、訪れた人の五感と記憶に訴えかけてくる他では経験することの出来ない不思議な魅力を持っている空間となっている。

■成田山川越別院本行院

成田山新勝寺の別院で真言密教寺院。「久保町のお不動様」で親しまれる。

目の病を不動明王に祈願して全治した千葉の石川照温が、廃寺となっていた川越久保町の本行院を嘉永6(1853)年に再興したのが起源である。

本尊の不動明王は、内外の諸難や穢れを焼き払い人びとを守るとされ、境内には絵馬堂もある。毎月28日には、蚤の市が開かれ、東京はじめ近在の古物商が露天を並べる。



成田山川越別院

■喜多院

○創建と変遷

平安時代初期の天長7(830)年、3世天台座主惠覚大師円仁(最澄の弟子)が星野山無量寿寺を開いたのが始まりだが、その後の戦乱や大火などで荒廃した。

鎌倉時代の永仁4(1296)年、比企郡都幾川村慈光寺の尊海が、慈恵大師良源(18世天台座主となつた天台宗中興の祖。「厄除け大師」の愛称あり)を祀つて無量寿寺を再興し、仏地院(中院)・仏藏院(北院)・多門院(南院)を建てた。

戦国時代、天文6(1537)年の川越合戦で焼失したが、慈眼大師天海が第27代無量寿寺住職となり、その後徳川家康の信任を得ると、北院は幕府の全面的支援をうけ急発展した。慶長7(1612)年に家康から「東叡山喜多院」の名をうけ、翌慶長8年には関東天台宗580余寺の本山とされた。

寛永15(1638)年の川越大火で、山門(棟札付、国重要文化財、寛永9年建立)以外は焼失した。(鐘楼門も焼失しなかつた可能性あり)

そこで、3代将軍家光は堀田正盛に命じてすぐに復興にかかり、江戸城紅葉山の別殿を移築して客殿・書院等にあてた。

家光誕生の間、春日局間があるのはそのためである。



喜多院境内图

○山門(国重要文化財)

山門は四脚門で、屋根は切妻造本瓦葺き、欄間の表に竜と虎、裏に唐獅子の彫刻がある。

○庫裏(国重要文化財)

庫裏(渡廊・玄関・広間付)は栃葺き形銅板葺きで、入母屋造と寄棟造とからなる。江戸城より移築された。

○客殿(国重要文化財)

柿(こけら)葺き入母屋造で、眼前に「転合(「ご冗談でしょう」)の庭」が広がり、3代将軍家光手植えの枝垂桜がある。

家光の廻と湯殿を経て「家光誕生の間」へ出る。ここには狩野探幽筆とされる墨絵山水図の襖や、81枚の花模様が描かれた格天井がある江戸城より移築された。

○書院(国重要文化財)

柿葺き寄棟造りで、8畳間の1つは春日局（明智光秀の家老齊藤利三の娘福、家光の乳母となる）の「化粧の間」で、眼前に枯山水「曲水庭」が広がる。江戸城より移築された。

○鐘樓門(銅鐘付、国重要文化財)

本瓦葺入母屋造りで、銅鐘(元祿15(1702)年銘、国重要美術品)もある。1階は袴腰とよばれる囲いがつき、2階には竜(前)と鷹(後)の彫刻がほどこされている。正保年間の再建とされる。

○慈眼堂(木造厨子付、国重要文化財)

本瓦葺宝形造りで、禅宗様式に和様をおり込んでいる。107歳で亡くなった天海の没後2年目の正保2(1645)年、家光の命で建立された。慈眼堂内には天海の坐像(文化時)が納められ、天海の死後も祀られる。

懸眼堂内には厨子に入った不道大海信正坐像(県文化財)が納められている。

○慈惠堂(県文化財)

慈恵大師良源と慈眼大師天海をまつる堂で、現在は喜多院本堂（大師堂）である。銅板葺き（もと桟瓦葺）入母屋造りで、寛永15（1638）年の大火後に再建された。延暦寺根本中堂・日光輪王寺三仏堂などと同一形

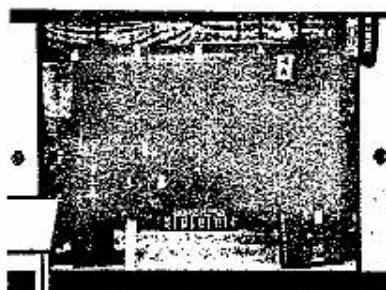
式である。堂内西入口に正安2(1300)銘の銅鐘(国重要文化財)が釣るされている。

○多宝塔(県文化財)

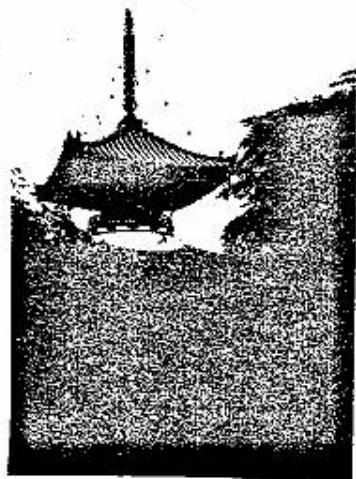
三間多宝塔で、下層は方形、上層は円形、屋根の上に相輪を配している。現在は内部に阿弥陀如来をまつっている。



慈惠堂



◆ 家先生誕の間



多宝塔

○五百羅漢

川越北田島の志誠の発願により天明2(1782)年より文政8(1825)年の約50年間にわたり建立されたもので、十大弟子・十六羅漢をふくめ533尊者のか、中央高座の大仏に釈迦如来、脇侍の文殊普賢の両菩薩、左右高座の阿弥陀如来・地蔵菩薩あわせて全部で538体が鎮座している。

○喜多院境内に古墳?

山門を入って前方左側、ちょっとした木立に囲まれて慈眼堂がある。じつはこれが慈眼堂古墳である。頭の中で慈眼堂がないものとして見てみると立派な前方後円墳であることがわかる。



慈眼堂古墳上に
建つ慈眼堂

五百羅漢

羅漢とは、仏教の苦しい修行の末に悟りを開いた人のこと。この石仏群は天明2年(1782)から文政8年(1825)にかけての約50年間にわたって作られた。中央高座の釈迦如来像を、十大弟子、十六羅漢を中心とした石仏が取り巻いている。ひとりひとり顔も違えばポーズも異なり、なかにはとんでもない顔たちの羅漢さまもいる。見知った顔が必ず見つかるといわれる、親しみの持てる石仏たちだ。

悟りを開いても表情は
さまざまな羅漢たち



200年もの間、同じ場所に皮りっぱなし立らっぱなしして、悟りを開いたはずの羅漢さまも少々ご退屈の様子。何やらものいいたげな心のうらをのぞいてみると——。

—合格発表、
見るのが
こわーい！



○天海僧正 長寿歌

義は長く 効めはかたく 色うすく
食はそうして こころひろかれ

■仙波東照宮

喜多院境内南に、本殿(宮殿付)
瑞垣および唐門、拝殿および幣殿
石鳥居、隨身門をもつ仙波東照宮
がある。

元和3(1617)年、遺言どおり家康
の遺骸は久能山から日光へ移さ
れることになり途中天海僧正によ
り喜多院で法要が営まれた。

この縁で寛永10(1633)年に喜多
院境内に東照宮が建てられた。

1638年大火により焼失したが、
1640年に再建された。現在の建
物はそのときのものである。

本殿は銅板葺きの三間社流造、
宮殿は板葺きの円形厨子、唐門
は銅板葺きの平唐門、拝殿は銅
瓦葺きの入母屋造り、幣殿は前
面が銅瓦葺き、後面は入母屋造
である。

本殿内部には馬上に鎧姿の木像
家康像をまつっている。

石鳥居は造営奉行堀田正盛が奉
獻「寛永15(1638)年」の銘がある。

隨身門は八脚紋の栱葺き形銅板
葺切妻造りで「寛永17年」銘の棟
札がある。

■中院

中院は星野山無量寿寺の中心で正安3(1301)年には関東天台宗
580余寺の本山となり、関東天台教学の中心であった。

日蓮は20歳の頃に尊海の導きで比叡山で修行し、建長5(1253)年
に日蓮宗を開き、その後中院で尊海から恵心(えしん)流の伝法灌頂
を受けたという。

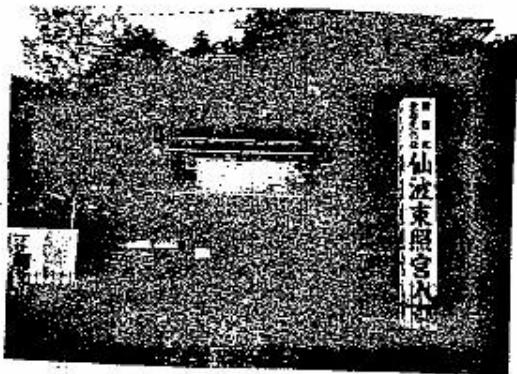
江戸時代に天海が家康の信頼を得ると中心は喜多院に移った。

現在は関東八檀林の一寺院として「天台宗別格本山特別寺」の称号
を持ち喜多院とは独立している。

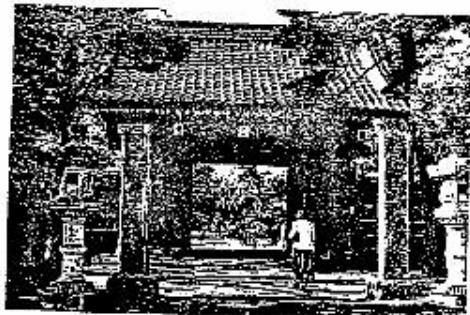
境内に「蓮月不染大姉」こと加藤みき(島崎藤村の義母)の墓があり
又、藤村が昭和4年に義母に贈った茶室「不染亭」が移築され、藤村
書の「不染の碑」もある。

北条早雲重臣の家系である太陽寺氏の歴代墓地もある。

なお、南院は明治初期の廃仏毀釈のなかで廃寺となつた。

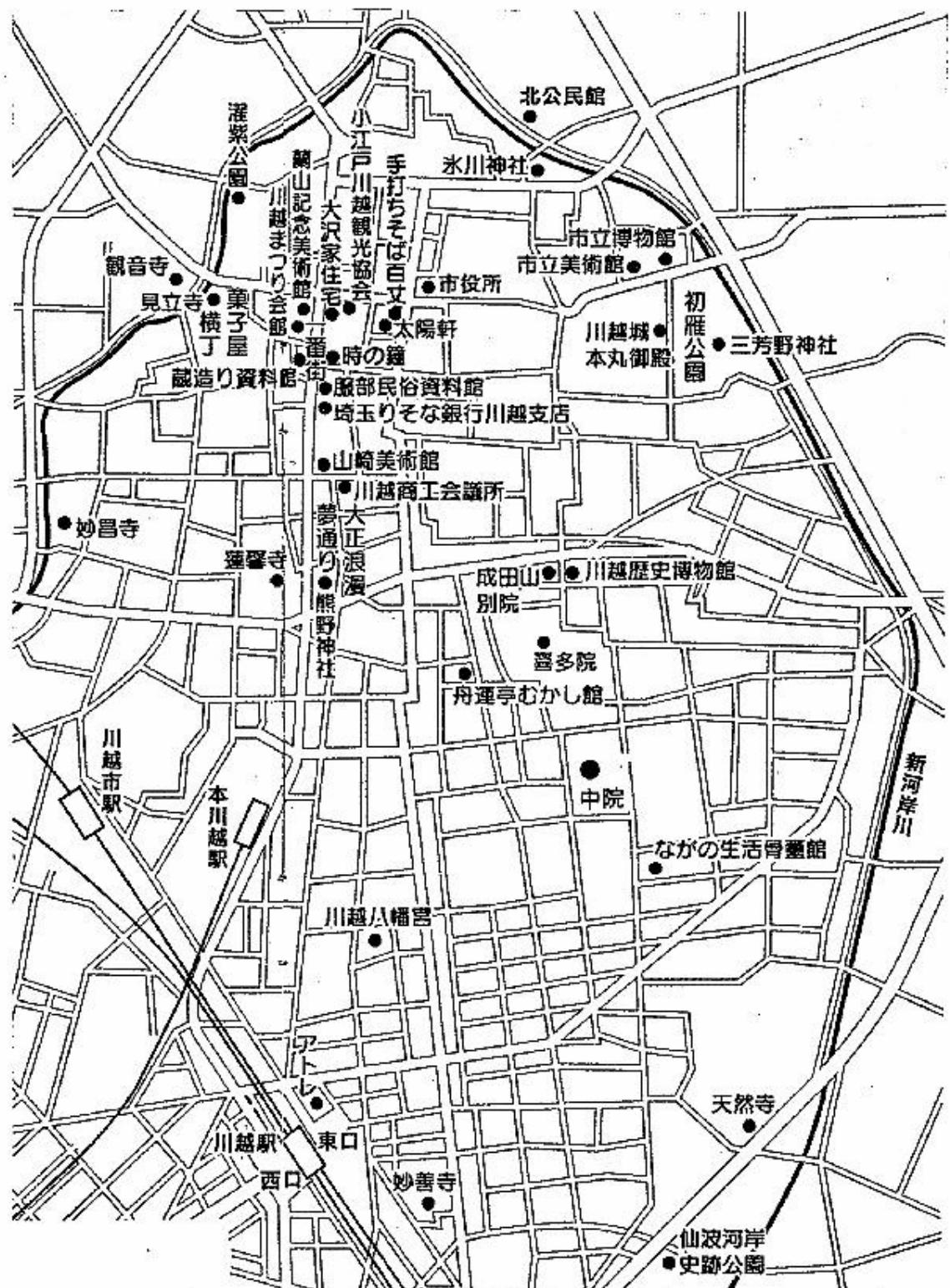


東照宮隨身門



中院山門

川越市街図



参考資料

- みるく(川越市編)
小江戸川越見る遊ぶ地図
(川越市観光課編)
小江戸川越散策マップ
(小江戸川越観光協会編)
川越市HP
川越のあゆみ(川越市制70周年記念誌)
埼玉県の歴史散歩
(埼玉県高等学校社会科
教育研究会歴史部会編)
川越 城と川のまちの歴史
(小泉功・齊藤貞夫著)
東武東上線歴史散歩(日野彰男著)
西武線全駅ぶらり散歩
(弘済出版社編)
さいたまの古墳めぐり(宮川進著)
川越市立博物館パンフレット
氷川神社パンフレット
喜多院パンフレット
川越城本丸御殿パンフレット
フリー百科事典「ウィキペディア」